

- (1) 単元名： 物語を紹介しよう。
 (2) 教材名： モチモチの木 斉藤隆介 (教育出版)
 (3) 本時の目標： 医者呼びに行く夜の豆太の様子を思い浮かべ、これまでの豆太と比べながら豆太の気持ちを読み取る。

奥間小学校3年担任、初任者のH先生。これまでも、何度か臨時教諭や定臨の経験を経て、奥間小学校が本務として初めての勤務となる。すべての不安を指導教諭と共有し、ベテランの先生方に日々指導を仰ぎながら、子ども達と切磋琢磨し、自問自答を繰り返し、「自己の学び」の充実を目指している。

「私はなぜ教師を目指したのか。」「私を目指す教師像」「私の学級では…。」これから積み上げられていこうとする教師としての経験の中で、今の私が持つべき学級経営のビジョン、教育の理念、一人の人間としての生き方の哲学を大事にしてほしい。今、私にその理解や実践がなされているかが勝負ではない、今は一人の教師として「そういう生き方」の方向を目指していく姿勢を持つことが大切である。繰り返すが「今は、できる、できないを問わない。」「これから一人の教師として、どうあるべきか。」自分の生き方の方向性さえ見つけることができればよい。子ども達もいっしょである。「今、できる、できないより、教師の手を離れた未来でどう生きれるか」が勝負である。

しかし、初任者研修という大きな課題があり、日々をこなしていくのがやっとの状況で、ゆっくり思想に入り込んでいる余裕などないのが現実でもある。H先生、研修も授業も淡々とこなしていきましょう。大切にしたいことは「子どもも、教師もわたしなりに精一杯頑張ってます。」誠意を持つこと、「わたしなりに、…」を許せる自分になりましょう。



☆文中の児童生徒の名前は全て仮名である。

【学級経営の基本】 整然とした教室でしか「深い学び」は生まれません。



どうです2枚の写真、落ち着いた整然とした教室がイメージできますね。基本中の基本です。こういう当たり前を大切にしている教師を目指してください。左の写真には、本単元の学習の出口に準備された斉藤隆介さんの絵本がありました。すでに読み終えた子ども達もいるでしょう。さらなるテキストへのつなぎと新たな「学び」へ期待します。



13:50 【淡々と授業開始】 机をコの字にかまえ、黒板には本時のめあてと大型教科書が提示される。



(1)～(3)の場面を振り返り、本時(4)の場面の「読み」に入る。各々自分のペースで読み進める。テキストは、教科書をコピーした(写真②)が使われた。子ども達の書き込みの様子を、後にポートフォリオの評価材料として活用するためだ。

授業者は全員音読の後に、指名読みで3名の児童に読ませた。人選に配慮あり。

13:57 教師：豆太のお家で何が起こったの？ → 全員に投げかける。→ 数名すぐ手を挙げて反応。



りく：じさまが たおれた ふりをしている。
 たかひろ：じさまが おなかが痛くなっている。ほんとに痛い
 教師：ほんとに痛いってどこからわかるの？
 たかひろ：歯を食いしばるのは、痛いのを我慢しているから。
 さて、このやりとりどう見ますか？一人の男の子は、じさまは、豆太に勇気を出してもらいたいから「しばい」しているのだとした。もう一人は、そんなことはない、じさまはほんとに痛くてしょうがないんだ…。この段階ですでに出た。この教材では必ずこの問いが出ます。お話の終末等でぜひペアに下ろしたい。「じさまは しばいだったのか？」様々な解釈でいい。結論は各々にゆだねる。様々な「読み」との出会いを大切にしたい。

14:11 【学びの滞りに音読を促す】



授業はプランよりデザインである。デザインは教師の見取りで判断すればよい。このクラスを誰よりも一番知っているのは授業者であるグループやペアでの「学び合い」に滞りを察した授業者は、数回の音読を入れた。えらい！よく見取った。そのままにしておくのだらだらと静かな沈黙が続いただろう。授業はプランよりデザインである、ペアで読んだり、グループで読んだり各々の中で「学び直し」が図られる。

- ▲ 「読み」に目的を持たせる。→「何」について読み取る。
- ▲ 学び合いのテーマを明確にする。→低学年には特に分かりやすく
- ▲ 3学年ではペアでの学び合いを基本としたい。
→「あんたとわたし」で話し合う。が分かりやすい。

読みについての「何」は、本来は一樣でない方がよいが、特に滞りからの解放を目的とする場合など。状況によって「～について」とか、読みの視点を明確にした方がよい。

14:21 教師：豆太の様子が変わるところについて、グループで話してごらん。



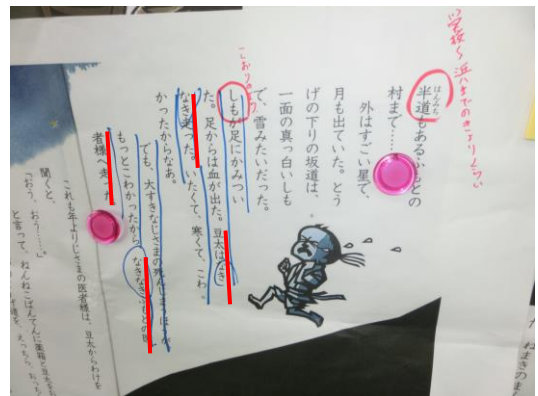
どうですか上の3枚の写真？「豆太の気持ちが変わったところはどこだろう。」互いに相手の考えを聴き、分からないことは「訊き合い」、互いに支え合い、自分にはなかった新たな「読み」との出会いである。静かにぼそぼそと「仲間との対話が交わされ」各々の自己の変容を図る。写真③、躓く仲間へ寄り添う女の子です。気にかけてくれる仲間がいるから「教室が居心地の良い」ところとなるのです。写真④、手前のグループ、奥のグループとも教室に一人も授業を投げ出す子が見あたりません。写真⑤、身を乗り出して聴き合う仲間達です。この3枚の写真は、いずれも授業者が、問をペアやグループに下ろしたときに起こっているのです。教師一人と子ども全員では限界があります。しかし、小グループやペアに下ろすと、静かな子も「話せる」のです。信じましょう。仲間は仲間で支え合う。

14:26【全体での共有】

2つの「なき なき」の意味
 「豆太はなきなき走った。」
 「なきなきふもとの医者へ…」
 授業者：2つのなきなきのちがいはなんだろう？



男子：前のなきなきは、いたくて、さむくてこわくての、じぶんのなきなきだけど、後のなきなきは、じさまが死んでしまうことへのなきなき。さらに、別の男の子が付け足した。「豆太はじさまのために勇気が出た。」



14:30【授業終末】教師：豆太が一番怖いのはなに？

ほとんど教室の全員が口をそろえる「じさまが死んでしまうこと。」

【研究協議】

《校長より》・読みのデザインへの変更は子ども達の気持ちの切り替えと立て直しとして有効的であった。

・前年度から見ているクラスだが、子ども一人ひとりの確かな成長がうかがえた。

《渡久地主事より》

- ・気になる子に気を遣いながら、柔らかな（言葉）で対応していた。
- ・椅子に座り子どもと同じ目線でしかも笑顔で進めていた。子ども達の多様な視点や意見を受け入れ、「つなぐ」によって全員参加を促していた。
- ・グループにテーマを下ろしたとき、子ども達の間で自然に支え合いがあった。

H先生、もうすぐ12月です。もうひと頑張りです。初任者研修も終わりますよ。頑張ってください。奥間小の同僚性は高いです。遠慮なく先生方に「依存」してください。素敵な授業ありがとうございました。

国頭学びの会ゆい